

## 「しもべとしての救い主」(マルコ一〇章二五〜四五節)

### 1 二人の弟子

受難節第五日目です。今日の聖書箇所には大切な聞きのがせないイエスの言葉、言明が伝えられています。今日の箇所のおわり、四五節です。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」。「人の子」とはイエスご自身のこと、「身代金」は、例えば口語訳聖書では「贖い(あがない)」と訳されていました。イエスはここでご自分の死の意味を自ら語っているのです。

この言葉をイエスが口にされたきつかけは、弟子たちの中に生まれた一種のいざこざでした。その弟子たちを教えさとす中で語られた言葉です。そのあたりをはじめに確認しておく必要があります。

ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが」。イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」(三五〜三七節)。

これだけ見ると唐突な感じを受けますけれど、これは直前のイエスの言葉に触発されて出てきたものです。

今日の箇所のすぐ前(二三節以下)でイエスは、人の子がとらえられやがて殺されることを予告しつつ、最後に「人の子は三日の後に復活する」といっています。この言葉に刺激を受け、イエスが栄光を現すときは近いと考えたのです。

このことはいわゆる山上の変貌(九・二〜八)とも関係しています。というのもヤコブとヨハネはこの少し前、ペトロとともに、イエスが栄光に輝き、モーセとエリヤと語り合っていることを目撃していたからです。

ところでマタイによる福音書(二〇章)を見ると、ここには、ヤコブとヨハネだけでなく、彼らの母も来たようです。母親が、イエスに、王座につくときには、息子たちを右と左に座らせてください、よろしくと願い出たのです。この女性も息子たちとともにイエスの群れに加わっていた。そして復活のことを聞き、イエスの栄光にあずかるうとした。このこと自体は必ずしも責められるべきことではなかったかも知れませんが、彼らはみな、復活を語る前にイエスが語っていた十字架のことは、少なくともこの時点で頭から消えていました。イエスのそうした十字架の死の予告がマルコ福音書でも、これで少なくとも三度目(八・三一、九・三一)であったのに、それは無視されたのです。

さて彼らの願いの中身です。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」。「栄光を受ける」とは聖書の別の表現では「栄光の座に座る」(マタイ一九・二八)。世が改まって、簡単にいえばイエ

スが王座につく、王として支配するようになるということです。その時、ヤコブとヨハネの兄弟は、自分たちが特別な位置につこうと望んだ。しかし弟子としてイエスに従うというのは、本来イエスと同じ道を歩む、イエスと一緒に歩むということであって、人間の願望を実現させる、野心を果たすというようなことではないのはいうまでもありません。

ヤコブとヨハネのことを聞いてほかの十人の弟子たちが「腹を立て始めた」（四一節）とあります。二人の勝手な言いぐさに憤慨したということでしょうけれど、少しく悪く解釈すれば、残りの弟子たちも口には出さなかったものの、似たようなことを考えていたということでもあるかも知れない。平たくいえば、二人は抜け駆けをしようにとした。それを非難するのは、本当は自分たちもやりたかったということの裏返しが多いのです。

## 2 わたしの杯、わたしの洗礼

このヤコブとヨハネの願いに対して、イエスは、どのようにお答えになったのでしょうか。

イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっているか。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼（バプテスマ）を受けることができるか」。彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる」（二八〜三九節）。

このイエスの言葉の前半、これは答えであり、また問いでもあります。それはイエスが君たちの願いは間違っているといつて、その要求を退けたということだけでなく、その本当の意味を、どうしたら栄光にあずかることができるのかを語ってもいるといつてよいと思います。

何よりもイエスのお考えによれば、君たちが栄光にあずかるのは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受ける道を通ってではないということです。「わたしが受ける洗礼」、これも十字架の苦難を意味します。水は人を死に至らしめる。「神よ、わたしを救ってください。大水が喉元に達しました・・・」（詩六九・二）という言葉があります。十字架を抜きに栄光はないということです。それはわたしに従うあなたたちも同じだとイエスは語っています。

イエスの問いに、「できません」と、二人は胸をはって答えています。この二人の決意は、むしろ軽く見てはならない、おとしめてもならない。ただこの「わたしの杯、わたしの洗礼」ということが、それを自分たちも飲み、かつ受けるということが何を意味するかを知ったのは、ずっと後になってからでした。二人が使徒として教会のため重荷を背負うことになってから、教会のための苦しみ救い主イエスと同じ苦し

であることを知ってからでした（コロサイ一・二四）。じっさいゼベダイの子ヤコブは、ヘロデ王の手によって首を切られ殉教の死を遂げ（使徒一二・二）、ヨハネも煮えたぎる油に投ぜられ、いわばそれによってバプテスマされて（ベンゲル）、殉教したと伝えられています。「できます」という二人の言葉はこうして現実のこととなったのです。

聖書はここで二人を非難しているように見えません。反対です。この箇所は二人が殉教したあとに書かれたものです。イエスの十字架とその死を正しく理解していなかった者だったけれども、いまやこうしてイエスの十字架の道を歩むようになったという信仰の告白があるようにも思います。キリスト・イエスの苦難に与るといふこと、与らしめられるということ、それが栄光に与るといふことです。十字架なしの復活がないように、苦しみなしの栄光はない、そうした彼らの信仰の告白です。

生前のこの時には、弟子たちはまだ、苦しみなしに栄光に与ることを考えていました。イエスが王座につく神の国では、自分たちも支配者となると考えていました。しかしイエスのまなざしは、いずれにせよ弟子たちの思いとは異なり、まっすぐに十字架へと向けられていました（三二節）。十字架を負うことが、イエスの思いの前面へ出ていたのです。

### 3 すべての人のために

さてそれならイエスの十字架の苦難と死とは何なのでしょうか。イエスを救い主として告白する、イエスに従うとはどういうことなのでしょう。イエスは「一同を呼び寄せて」それを明らかにしています。

「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。「なぜなら」人の子は仕えられるためにではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである「から」」（四二〜四五節）。

最後の四五節は、もとの文章では「なぜなら」という言葉で始まります。それによってここに示されているイエスの在り方は、弟子の在り方、教会の在り方でもなければならぬこととなります。イエスが「仕えるために」来たように、イエスが「自分の命を献げるために来た」ように、弟子たちもまた、教会もまたそうした在り方において歩むのです。

このイエスの在り方を基準として考えれば、その正反対の在り方は、民を支配し権力を振るっている、この世で「支配者と見なされている人々」、あるいは「偉い人たち」において見ることができません。

ただここでそうしたこの世の支配者たちの在り方が非難されているかという点、そ

れは少し違うように思います。聖書は彼らを「支配者と見なされて、人々」といっています。またそっけなく「偉い人たち」といっています。何かそこに価値を見いだしている、恐れ入っている、感嘆している、というのではない。したがって逆に彼らを非難しているというのでもないのです。きわめてさめた見方をしていることを私は申し上げておきたいと思います。

それに対して「あなたがたの間では、そうではない」のです。イエスに従う者たちの間では、私どもの間では、教会では、イエスの在り方、イエスの生き方こそが、私どもの基準です。それはイエスがそうであったように、人に仕える、僕となる道にほかなりません。

イエスは、「多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」と語っています。「身代金」として、です。私ども人間が、何者かに捕らわれているという事態が想定されています。

あまりピンとこないと思います。しかし聖書は人間を、悪の力、そしてその悪の力の、いわば配下としての罪に捕らえられていると見ています。そこから私どもは自力で脱出することはできない。神は身代金を払って、私ども人間を、神のもとに買い戻してくださったというのです。この買い戻すことを贖いと申します。この贖いのために、身代金として差し出されたのがイエスです。人の子イエスはまた神の子、その独り子です。イエスを差し出したということは、神がご自身を差し出した、ご自身を犠牲にしたということです。あなたのために一人の人が死んだ、いや神がご自分を犠牲にしたのだと聖書は語っています。

何故神はそれほどまでに？ そう問うてよいと思います。さきほどの「多くの人の身代金として」にもう一度注意したいと思います。「多くの人の・・・」と訳されているのは、多くの人「に代わって」という言葉です。「代わって」という言葉はまた「ために」という意味です。ここに聖書の根本的なメッセージがあります。神は私ども人間の「ために」いますのです。神ははじめから、したがって創造の以前から私ども人間のためにいますのです（エフェソ一・四）。

使徒パウロはローマの信徒への手紙八・三一でこういつています。「もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか」。「味方である」は「ために」ということです。人間のためにいます神。この神は私どもの外に立って私どもの「ために」おられるだけではない。私どもの内側から私どものためにいます。それゆえ私どものために重荷を自分のものとして背負いたもう神です。そしてそれには私どものために命を捨てたもう神です。それは私どもにオンを着せるためではない。私どもが救われるためです。私どもが生きるためです。そして私どもが、私どものためにおられる神とともに他の人のためにあるためです。

(二〇一九年四月七日)